

(邦訳)

## ハンス・フォルケルト： 国家社会主義者としてのわれわれ幼児教育者が歩む道 1934年

人文学部教授 勝 山 吉 章

Prof. Dr. Hans Volkelt: Unser Weg 1934.

それ故「祖国」は…家族がただ、それらのなかでその人間的な使命を果たし、獲得することが出来る最初の外的な制約であり要求なのです。(フリードリヒ・フレーベル「生命の革新」より)。

多くの点で満足いや誇りをもって確認できることは、フレーベル連盟や雑誌 Kindergarten は、何らの根本的な変革を必要としないことである。文字通り、フレーベル連盟や雑誌とその読者達が、自らの使命と感じたことは、ペスタロッチやとくにフレーベルの遺産を維持することであり、文字通り彼らは、家族や家、郷里や民族性の良き力を守り、促進したし、文字通り、彼らは忠実に、フレーベルによって教えられたこれら結局は神に由来し、神に戻る生命の諸力の認識を保持した。彼らは、言葉や文字で、とりわけ犠牲を厭わない社会的行為で、精神的倫理的に沈下し、その心情的生活において皮相化する市民主義の時代において、さらに、このような墮落した市民主義的考えと、魂を荒廃させ、民族いやそれどころか青少年や子どもの心情を完全に破壊するマルクス主義との危険な合体化の時代において、この神的な生命価値に対する彼らの認識を守った。

ドイツの魂を無気力にし、有毒化する非常に恐ろしく長い冷たい暗闇の年月の間、とりわけ Kindergarten に結集した夫人や少女達が、大変暖かく、光りに満ち、覚醒して疲れを知らない愛、心情の大きな聖なる力を維持していた。そのことをドイツの教育史は感謝することになるし、このことを第三帝国は彼女らに報いることになるだろう。というのは、私たちの多くの人たちによって熱望され、彼女らが人生において熱望した時代が始まったからだ。その時代とは、私たちがドイツの心情やドイツの意志において、家族のなかに隠していたもの、私たちが幼稚園や幼児施設、託児所やその他子どもの養護場所において、しばしば、物怖じしながら、秘密裏に、禁じられたやり方で叱責されたり、いや罰せられることも度々だった—子どもや若年の魂に流し込んだものが、自由に、公に、新しいドイツ国家の強い保護下で展開し、

作用することが可能で、そうしなければならない時代である。

しかし新しい国家が、言及した功績を全面的に認めるにあたり、雑誌 Kindergarten の協同者や読者に期待するのは、相当に且つ本質的に別のことだ。なぜなら共同体意識、例えば家族意識は、さらなる民族主義的なもの無しに、何ら成就されないからだ。あらゆる「ドイツ的」な共同体意識もそうだ。ドイツ的な古典的＝ロマン主義的な、もしくは後期市民主義的自由主義的意識は、長い間、地と大地、運命と共同の服従による国家社会主義的結びつきではない。同胞愛、家族共同体、いや祖国への信念は、今まで、たいていはもっぱら、直接的に、自由主義的時代の社会的感覚や行為のかの二極に関連付けられた。つまり個人主義と、—しばしばただ曖昧に提示され、熱狂的に夢想された—人間性に。民族全体の生命価値 (Lebenswert) や生命正義 (Lebensrecht) は、国家社会主義国家においては、民族に組み込まれた共同体や個人主義の全ての生命価値や生命正義を越えてはるかに荘重な有無を言わせない不可侵性にある。

今までよりもはるかに親密により直接に、私たちの民族の運命が私たちの魂のうで燃えており、全ての教育者や社会的援助者は、まず最初に—そしてちょうど常に同じく直接的に—人種、土地、歴史や民族主義的な現在の危機を通して結びついた民族同胞の全体にとって価値がある。

だから、国家社会主義的国家においては、人間への奉仕は、ほとんど例外なく、ただ自らの民族への奉仕によって可能かつ許されるのだ。

これまでのあらゆる社会的活動や慈善活動は、もっぱら個人主義や同時に人間性を志向するヒューマニズムによって担われたけど、新たなものによって担われねばならない。つまり、民族主義的なヒューマニズムによって貫かれ、そのヒューマニズムから新たに熟慮され、そこから改鑄されるといったものである。

この民族主義的人間性は、部分的には、非常に以前とは異なるが、だからといってより価値の低い「人間的」ではなく、いや、私たちは次のように主張する。民族主義的人間性の愛は、これまでの人間性よりも熱烈で、そ

れ故、その行為においては過酷で厳しい—厳しい愛！—だからかの民族や人間性のための愛よりも有益なのだ。国家社会主義的ヒューマニズムは、それが本当にみずから発展できる限り、最終的には、あらゆるこれまでの人間性よりも人間的であると判明するのだ。

だから私たちは、古いものと新しいものを分離しておくことを決定せねばならない。昔と現在の相違は、消されてはならない。それはまた、ドイツの過去の偉大な教育者に対して依然として示される感謝と信頼性のためではない。なぜならペスタロッチやフレーベルの感情や思考は、私たちの今日的なあらゆる考え方の驚くべき響きのまえでは、その根本においては他だから。確かにとくにフレーベルは（とりわけ、フレーベル連盟で最近初出の『生命の革新』において）、家族と人間の間の人間性全体の構成において、とくに民族を差し込んだ。そして民族を家族と同じように、人間の本質的な「部分的全体」（Gliedganzen）として特徴付け、価値を置いた。そして、全ての家族や全ての他の共同体のように、私たちの民族に対する全ての民族同胞の直接的な、私たちを今日非常に充足させる親密さ、つまり私たちの全ての存在や行為のこの「民族との直接性」（Volksummittelbare）は、フレーベルの一部だった。彼は、同時代の多くの高貴な思想家と同様に、人生の価値を、人間性の非常に普遍的な理念の実現化において模索し、最も好んで、個々人において直接的に「人間の生命」、「全き人間性」が明らかにされることを望んだが、本質的な特徴において違う。

同様に、私たちの社会的労働を第三帝国に移す際に、昨日と今日の間の何らかの相違や対立が黙認されたり隠されたりしてはいけない。だから「国際的」と「国家的（ナショナル）」な間のみならず、「国家的」と「国家主義的 nationalistisch」な間にも、深い相違があって、私たちにとりわけ関係することは（そして、次号で引き合いに出される頁で明らかにされるはずだが）、「社会」と「社会的 sozialistisch」、「マルクス主義」と「ドイツの社会主義」の間には相違があるということ。

だからナショナリズムが、熱狂的に高揚した祖國的な立場の様式であり、他の民族いわんや他のナショナリズムを排他的に低く評価したり、全く見くびったりすることとは全くかけ離れているように、「社会主義」は、情熱的に高揚した社会的態度の様式で、しかも、民族共同体への個々人の持続的な犠牲的献身まで高まるのだ—この献身は、国家社会主義国家においては私的にも公的にも、自由意志として（かかるものとして国家によって最大級に要求されるが）、法律にまでも高められる、いや、厳格に強制されるのだ。そしてドイツの社会主義はその上に、平等主義や水平化による万人平等ではなく、同格な大衆へ万人を押し込むのでは全くなく、ドイツ社会主義は、「個々人による犠牲共同体」なのである。各個人や同様に各共同体は、常により上位の共同体全体を、

さらには彼ら全てを包括する「民族の生命全体」を求め、何がしら認めるように強力に教育され、そこまでかたち造られるべきなのだ。個々人は人格であり、全ての真の共同体は人格に適った特徴をもつことは、それ故ドイツ社会主義によって肯定されるのみならず、情熱的に要求される。国家社会主義は、そう国家や生活のかたちと同じように、「指導（命令）と意味のある服従」へと陶冶された人間を必要とする。その際に人格は、つまるところ決してはや自己目的でないことは明らかで、最深の根本では、その固有の価値において、民族全体のために奉仕する価値によってのみ正当化される。

ドイツ・フレーベル連盟、ドイツの社会教育女性ゼミナールや類似の養成所、そしてとくに職業に従事している幼稚園女教師、保育所保母、青少年女性指導者ならびにそれ以外の社会的活動における全ての援助者が、大きな課題の前に立っている。その課題とは、彼らのこれまでの活動によって第三帝国に何らかの貢献が出来ること全てを保持し、強化することであり、他の担いきれないものを突き放すかわりに、この国家が求める新しいものを付け加えることである。だから彼らは、私たちは確信するが、古いものと新しいものから、第三帝国において劣らない生命の満ちた全体を形成することを学ぶだろう。つまり、新しいドイツの生命共同体で犠牲共同体におけるかけがえのない「部分的全体」。

このことを実現するためには、自他ともに多くの協力者の長年の活動、古いものや新しいものをめぐる根本的で本当の闘い、多くの慣れ親しんだ確信の正しい改革、学び直し、再教育が実際上の多くのところで必然だ。この際に、雑誌「Kindergarten」が決定的な助力を提供するはずだ。いまや74年にわたってこの雑誌で行われた誠実で多様な専門的活動は、それはなんらか現在にとっても未来にとっても重要だが、多くの人と愛によって前進されねばならない。そのとき、その活動は、この新しいドイツ国家を満ちす精神によって貫徹されねばならない。この変革は、大急ぎですることなく、目新しさを求めるのではなく、慌ててするのではなく、それ故未成熟なプログラムを作るのではなく、ひたすら信頼できる活動のなかで生じるべきだ。

予定されるフレーベル連盟の同質化（Gleichschaltung）のよって、その必然性を現在のフレーベル連盟のリーダーは、印刷物からではなく、外部からの示唆からでもなく、1933年夏には知っていたが、また、この雑誌の出版社のもの分けりの良い犠牲的精神に富んだ好意によって、とりわけ Hans Schemm の忠誠によって、彼はドイツ教員団の結成にあたって青少年の就学前教育や学校外教育に従事している人たちのことを決して忘れなかったが—これら全てのことを通じて、今日までのフレーベル連盟と、幼稚園女教師、保育所保母、青少年指導者との協働を十分に維持すること、いや、一層強

化し、深めることが可能となる。さらにこのことは、まずは何よりも、次のことによって確保されねばならない。つまり雑誌 Kindergarten が、さらにドイツ・フレーベル連盟の機関誌であると同時に、幼稚園女教師、保育所保姆、青少年指導者、とりわけ、今まで「幼稚園女教師、保育所保姆、青少年指導者の職業組織」(BO) に結集していた人たちの職業的専門集団の機関誌であり続けることである。このことは次のことによって達成されるべきだ。つまり、月刊誌 Kindergarten が、いままで「職業組織」(BO) の広報だったように、これから国家社会主義教員連盟 (NSLB) における「幼稚園女教師、保育所保姆や青少年指導者の帝国専門家グループ」の広報を、同様に、計画されている社会教育女性ゼミナール教員の帝国専門家グループの広報を含むこと、同時に、雑誌に対するフレーベル連盟の今までの関係を変えずにすることである。これによって、とりわけ理論と実践の内的な交互の浸透が維持されるはずだ—研究、理論と応用の実り多い結びつきは、Kindergarten を、すでにこれまで欠くことのできない専門誌へ、とくに、学齢前の子どもの保育や教育のための、学童や青少年の学校外の指導のための専門誌にした。

ここでさらに、私はお知らせする権限を与えられている。

NSLB の帝国指導者、Schemm 大臣は、私に12月29日の Bayreuth で保証した協議において、あらゆる躊躇なく、全きところから、また充分にして愛情深き理解でもって、フレーベル連盟、幼稚園女教師、保育所保姆と青少年指導者ならびに女性ゼミナールの教員たちの課題のために、雑誌 Kindergarten における当事者との一層の協働に賛成し、同時に、彼としては、この協働を一層確かにする可能性のある全てを指示した。NSLB の帝国での指導は、私たちの雑誌での専門的活動の継続を、それが NSLB の責務であるかぎり、あらゆる手段で促進しようとするのである。それ故この雑誌は、これまでの BO のメンバーと同様に、いまから特別な代償なしに、NSLB における関係する帝国専門家グループのメンバーに届けられねばならない。

フレーベル連盟の指導者は、この取り決めですでに合意した。そして、今まで NSLB の個人的メンバーではなかった幼稚園女教師、保育所保姆、青少年指導者が、再び、今までのように、彼らの専門誌を受け取れるようにするために、このことを是認することが、いまや彼らの課題である。

ひょっとして NSLB は、私たちの分野では、専門的活動をもしかして政治を通して迫害しようとするのではないかといったいろんな心配が生じるが、そんなことは考えなくても良いし、事実が反証する。そうではなく

NSLB は、具体的で確かな方法で、私たちの専門的活動の持続的成長を助ける。つまり、NSLB は専門誌 Kindergarten で、この専門的活動で今日まで最も重要な位置にいたフレーベル連盟と協働することをオープンにしておき、その役に立つ用意をしている。

Kindergarten の恒常的な協同者は、当然ながらフレーベル連盟の成員であり、NSLB における二つの帝国専門家グループの一人でなくてはならない。彼らのほとんどは、NSLB に、同時にフレーベル連盟に—そもそも最も望ましい結びつき！—所属するだろう。今日までの協同者の相当部分は、雑誌を購読するだろう。国家社会主義公共福祉局に対するベストな関係もつくられることが期待される。

私たちは、それゆえ確かな確信でもって、新しい年の活動を始めることが出来る。フレーベルの遺産を大切にする人たち、私たちの愛する祖国のドイツの家族やドイツの青少年を他国と同じようにここに抱きしめている人たち全てに、私は呼びかける。

新しいドイツの精神で、フレーベルの教育理論の力溢れる再生と断固たる継続教育を！

レイプチッヒにて、1933年大晦日

ハンス・フォルケルト

(解説)

この邦訳文は、Kindergarten: Zeitschrift für die sozialpädagogischen Aufgaben in Familie und Volksgemeinschaft unter besonderer Berücksichtigung der Kleinkinder- und Schulkinderpflege, 1934, Nr.1に掲載された Hans Volkelt: *Unser Weg* 1934 (S.1~5) を全訳したものである。

Volkelt は、哲学者 Johannes Volkelt の息子でライプチッヒの König Albert ギムナジウムに通学。1912年、動物心理でライプチッヒ大学で学位。1921年から当地で私講師。1925年に、発達心理学と政治教育学で非常勤講師、1933年には常勤講師。1932年からナチス党员で、1933年にはライプチッヒ大学附属の国民学校教員養成所の校長で心理研究所所員。1933年11月には、ヒトラーに忠誠を誓うドイツ教授に署名。1935/36年、教員養成所は、高等専門学校に昇格。Volkelt は、ライプチッヒ大学教授に就任したかったが、ナチズムを嫌ったテオドール・リット (ライプチッヒ大学長) の反対で常勤の教授にはなれなかった。1939年、Volkelt の指導で、自らの心理教育学校を設置。1935年から38年まで雑誌 Kindergarten の編集者。同誌をナチズム的価値観で編集し、また同誌でナチズム的幼児教育論を展開した。1945年ドイツ敗戦以降は、ナチズムに対する反省を表明することなく心理

学研究に戻り、Bietgheim で教授として生きた。

雑誌 Kindergarten は、最も古い幼児教育の専門誌の一つで、1860年4月に刊行された。1873年からは、「ドイツ・フレーベル連盟」(DFV)の機関誌となり、1924年からは三つの連盟の連絡誌となった。つまり、①DFV、②「幼稚園女教師、保姆、学童指導員の職業組織」、③「ドイツ学童保育連盟」。1933年からは、DFVの解体まで(1938年末)、Kindergarten は、ライプチッヒの Quelle & Meyer 社で編集され、その後、ミュンヘンにあったナチ出版「ドイツ民族出版」で編集された。

すでに1933年6月8日には、Kindergarten は、「ドイツ・フレーベル連盟およびNSLB(国家社会主義教員連盟)の帝国専門団Ⅶの専門グループA・Cの雑誌」と宣言された。1933年末、Kindergarten は廃刊を迫られたが、NSLBの指導者 Hans Schemm の仲介によって阻止された。1935年10月、Volkelt が、DFVの議長としての役割に加えて、1924年来、Elfriede Strnad の所有だった Kindergarten の編集を引き受けた。編集部は、ハンブルクからライプチッヒに変わり、DFVの本部と統合された。1938年12月31日の活動をもって Volkelt は専門誌の責任者を辞めた。

本邦訳は、1933年末をもって廃刊の危機にあった雑誌 Kindergarten が、からくも存続を続けられることになったことから Volkelt が、1934年初頭にあたり、フレーベル研究や幼児教育実践をナチズムの論理に適合させることを強く宣言したと言えるものである。

この頃から雑誌 Kindergarten は、その論考の冒頭にフレーベルの言葉を掲げ、国家社会主義が唱える民族主義や愛国心へと牽強付会することが目立ってくる。本稿

も、その典型であろう。フレーベルは、ナポレオン支配下のドイツで、アルントやフィヒテそしてヤーンなどの愛国心や民族主義に共鳴し、やがて対ナポレオン祖国解放戦争に従軍したことから、愛国心と民族主義を表明している。それは反封建的ドイツ領邦制国家からの離脱を唱え、市民民主主義的自由を謳うものでもあった。彼の部分的全体や生命合一の思想も、個と全体の同等を意図するものであったが、Volkelt は、それを個に対する全体の優位へと換骨奪胎している。そして「フレーベルと同じように」、幼児教育関係者は、個を犠牲にして民族共同体に奉仕すべきものとされている。

当時の時代状況から、幼稚園施設や幼稚園教師そして雑誌 Kindergarten を存続させるためには、ナチズムへのすりよりは、致し方なかったという見方も出来るであろうが、Volkelt 自身がナチズムを積極的に推し進める立場にあったとする見方の方が正解であろう。

#### (参考文献)

- ・ Manfred Berger: Hans Volkelt (1886-1964), IN: NIFBE (Niedersächsisches Institut für frühkindliche Bildung und Entwicklung)HP より
- ・ Ernst Klee: Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2007。

※本稿執筆にあたっては、上坂元絵里氏(お茶の水女子大学附属幼稚園副園長)、松島のり子氏(お茶の水女子大学助教)、湯川嘉津美氏(上智大学教授)にご援助いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。